

大勧進重源

源平の動乱と東大寺再興 重源登場

大勧進造東大寺大和尚南無阿弥陀仏。これは狭山池の中樋から出土した「重源狭山池改修碑」の碑文に刻まれた、僧重源の名です。阿弥陀仏を信仰する俊乗房重源は、自らを南無阿弥陀仏と称していました。東大寺を再興した「大勧進重源」。弟子や技術者たちの名とともに、自分の名を石碑にそのように遺したのです。

平安時代の1121年（保安二年）に生まれた重源は、13歳で出家して京都の醍醐寺に入り、各地の山岳で修行を重ね、仏法を学ぶために宋（当時の中国）へ3回行ったといわれます。

1180年（治承四年）、源頼朝が挙兵して源平の動乱が始まると、奈良の興福寺と平重衡の軍勢との合戦で、平家軍が放った火が興福寺、東大寺などの伽藍を焼き尽くし、奈良時代に造立された東大寺の大仏（盧舎那仏像）も溶け落ちてしまいました。大仏が焼けて無くなるのは、当時の人びとにとって、自分の父母が他界するのと同じくらい悲しいことでした。後白河法皇の意を受けて、再び大仏を鑄造することになり、1181年（養和元年）、重源が東大寺再興の責任者である造宮勸進に抜擢されました。

奈良時代、東大寺の大仏は「知識」によって造立されました。「知識」とは、寺や仏像を造るときに資材や労力を提供する行為と、その人びとのことを意味します。狭山池を改修した行基も、聖武天皇から東大寺大仏造立の責任者として起用され、人びとから広く寄付を募る「勸進」で「知識」を集めて大仏を完成させたのです。その440年後、重源は行基を尊崇するともに自らを行基になぞらえ、集った勸進聖たちとともに諸国を勸進してまわりました。1183年（寿永二年）、重源は宋の技術者たちを招聘、大仏の鑄造を開始しました。そこに草部是助をリーダーとする河内鑄物師たちも合流して大仏の鑄造が続けられ、1185年（文治元年）に鑄造が完了しました。その後、重源に従う弟子たちと技術者たちは、各地に活動拠点を築いて木材や瓦と資金を集め、伽藍の復興に全力を注ぎます。今も現地に残る東大寺南大門と仁王像が完成し、東大寺が、ほぼ完全に再興されたのは1203年（建仁三年）で、再興事業の開始から20年以上が経っていました。重源は86歳でこの世を去る直前まで、人生の後半生を捧げて東大寺をよみがえらせたのです。

奈良時代、東大寺の大仏は「知識」によって造立されました。「知識」とは、寺や仏像を造るときに資材や労力を提供する行為と、その人びとのことを意味します。狭山池を改修した行基も、聖武天皇から東大寺大仏造立の責任者として起用され、人びとから広く寄付を募る「勸進」で「知識」を集めて大仏を完成させたのです。その440年後、重源は行基を尊崇するともに自らを行基になぞらえ、集った勸進聖たちとともに諸国を勸進してまわりました。1183年（寿永二年）、重源は宋の技術者たちを招聘、大仏の鑄造を開始しました。そこに草部是助をリーダーとする河内鑄物師たちも合流して大仏の鑄造が続けられ、1185年（文治元年）に鑄造が完了しました。その後、重源に従う弟子たちと技術者たちは、各地に活動拠点を築いて木材や瓦と資金を集め、伽藍の復興に全力を注ぎます。今も現地に残る東大寺南大門と仁王像が完成し、東大寺が、ほぼ完全に再興されたのは1203年（建仁三年）で、再興事業の開始から20年以上が経っていました。重源は86歳でこの世を去る直前まで、人生の後半生を捧げて東大寺をよみがえらせたのです。

臥石樋事六段―重源の狭山池改修―

重源が晩年に著した「南無阿弥陀仏作善集」には、彼の生涯における仏教的な善い行い「作善」が綴られています。そこには東大寺再興事業について書かれるとともに、かつて行基が関わった土木事業の再実施や、行基が建立した寺院の再興についても記され、重源の行基への厚い尊崇の念がうかがえます。作善集の末尾近くに「河内国の狭山池は行基の旧跡であるが、堤は崩壊し、すでに山野と同じようになっている。これを改復させるために石樋を臥せる事六段云々」と、重源の狭山池改修の内容が記されています。重源は長さ六段（約65m）もある石の樋管を埋設したといっています。

市の名誉市民である末永雅雄博士は、大正・昭和の改修時に、中樋放水部で古墳の石棺を樋管の形に加工したものを発掘し、重源の「石樋」であろうと論及していました。



古墳の石棺を連結する重源の「石樋」

発掘調査で出土した中樋

平成の改修に伴う発掘調査では、北堤のほぼ中央付近の裾から江戸時代の中樋が出土し、その両側の石組には、末永博士が発掘したものと同様の古墳の石棺を再利用した「石樋」が積み重ねられていました。そのうちの二つには直径30cmの円形の穴が開けられており、取水部に使われていたことがわかります。

さらに、出土したこの石組には、驚くべき秘密が隠されていました。石組の中にある和泉砂岩の石材には文字が刻まれており、その文字を辿ると「敬白三世十方諸佛菩薩等 狭山池修復事」で始まる重源の狭山池改修のようすが碑文として刻まれていたのです。この「重源狭山池改修碑」には、行基が64歳のときの731年（天平二年）に初めて堤を築いて樋を伏せたが、年月を経て壊れてしまい、摂津・河内・和泉の狭山池水下の50あまりの郷の人びとの要請により、重源が82歳のときの1202年（建仁二年）の春から改修を計画したとあります。そして、同年2月7日から土を掘り始め、4月8日から石樋を伏せ始め、同月24日に工事が完了したこと、僧侶もそうでない人も性別や年齢・身分の区別を問わずに力を合わせて石を引いて堤を築いたこと、この行為は己の利益などのためではなく公益のためであることが述べられ、改修への参加によって仏と縁を結び、世の中の生き物がみな等しく幸せになれるようにとの願いが刻まれています。

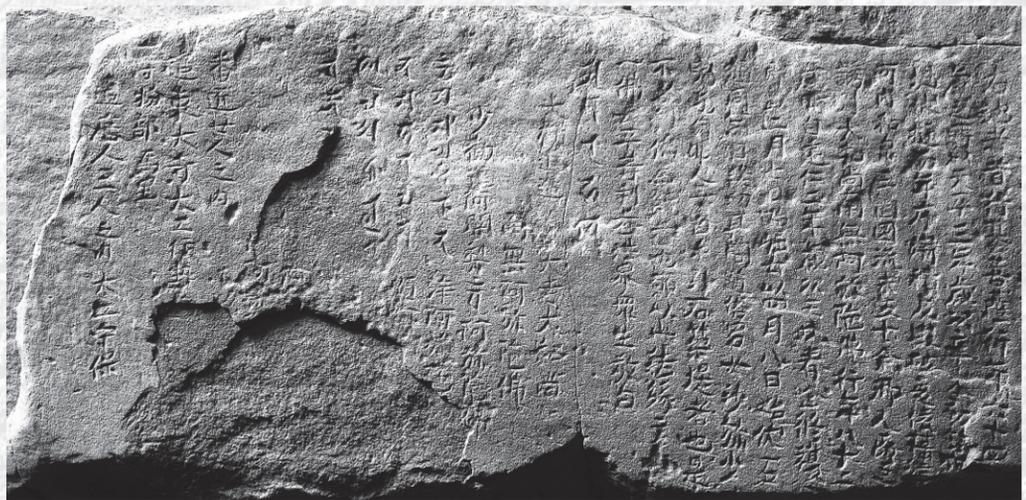
源平の動乱という激動の時代。人びとを絆で結び、強力な統率力を発揮して東大寺の再興事業を成し遂げ、宋の進んだ技術や文化をわが国にもたらした重源。狭山池博物館の常設展示で、重源の偉業を体感してください。



敬白三世十方諸佛菩薩等
狭山池修復事
右池者昔行基菩薩行年六十四
歳之時以天平三年歲次辛未初築
堤伏樋而年序漸積及毀破爰依摂津
河内和泉三國國流末五十餘人氏之
誘引大和尚南無阿弥陀佛行年八十二
歳時自建仁二年歲次壬戌春企修復
即以一月七日始掘土以四月八日始伏石
樋同廿四日終功其間道俗男女沙弥少
兒乞向非人等自手引石築堤者也是
不名利偏為饒益也願以此結縁□□
一佛長平等利益界衆生敬白
アハラカキヤ
大勧進造東大寺大和尚
南無阿弥陀佛
少勧進阿闍梨ハシ 阿弥陀佛
オナボキヤベイロシヤ 浄阿弥陀
ナウマカーボタラマ 順阿□□□
ニハントマジンバラハラ
ハリタ（ヤウイン）
阿
番匠廿人之内
造東大寺大工伊勢
守物部為里
造唐人三人之内 大工守保

重源

強力な指導力をもった重源のもとには、多くの人が集まった。宋の石工・鑄造技術者、河内鑄物師、仏師、大工たち。東大寺南大門の仁王像を造った運慶・快慶・湊慶もその中にある。



重源狭山池改修碑 [上↑] とその碑文 [右上↑]

今回の「狭山池一四〇〇年の歴史②」は、「狭山池再生」と題し、天災で大破した狭山池が、江戸時代、慶長の改修を経て復活する様子を紹介します。

問い合わせ 歴史文化グループ